

博士論文（要約）

保田與重郎——保守知識人はかく考えき

総合文化研究科言語情報科学専攻

小松原孝文

本論文では、昭和期に評論家として活躍した保田與重郎の思考の軌跡を明らかにした。これまで保田は論理を無視して美的なものに逃避しているとしばしば語られてきた。また、そのテキストの分析も限定的であり、戦前から戦後にかけての長い期間にわたってテキストを検討する試みはほとんどなされてこなかった。本論文では、このような従来の研究の課題をふまえて保田與重郎を再考することを目的とする。

まず、保田の文学活動の理論的な基盤を把握するために、初期の文学に関する評論に着目した。保田の文学観の基礎には、言語と現実の乖離のなかで作家が無限に反省を行うということがある。これはドイツ・ロマン派の「イロニー」の考えに基づくものであるが、保田にとってその問い直しの運動は自分の書いた言葉にも向けられ、単一的な主体を解体する方向へと向かっていくのである。

こうした理論に基づきつつ、次に保田の代表的なテキストである「日本の橋」を検討した。自らの言葉を反省して組み替えていくという戦略からテキストを読み説くとき、このテキストは橋を美的に綴るものでもなければ、「日本／ローマ」の二項対立的な文明論でもなく、近代のヨーロッパ中心の歴史観を問い直すものであるということが明らかになる。それは同時に「日本」というものの固有性や主体性を揺るがすものでもあるが、保田は「日本」というものを、むしろ手法として強固に立ち上げるのである。

続いて保田の古典に関する議論を問題にした。日本武尊を扱い言霊の悲劇を問題にする「戴冠詩人の御一人者」や、隠者の系譜を日本の文学史の核に置いた「後鳥羽院」というテキストを分析することで、保田が古典を問題にしなが、実は近代の天皇や同時代の戦争に目を向けていたことが浮き彫りになる。保田の議論は、当時の国体や日本主義の言説に題材を重ねつつ、それとは批判的に距離を置くものなのである。

最後に戦後のテキストとして、沖縄に関する記憶の忘却を問題にした「みやらびあはれ」や、戦争放棄を宣言した戦後憲法の解釈が見直されるなかで書かれた「絶対平和論」というテキストを検討した。それにより保田が「近代」という時代そのものに潜む問題を批判していることが鮮明になり、戦前から戦後にかけて転向を行わない保田の一貫する立場というものも明らかになった。

以上のように、本論文では保田のテキストを戦前から戦後にかけて見渡し、理論的に検討することを試みた。そこから見えてくるのは、美的なものへ逃げているという従来の保田の評価とは全く異なるものである。保田は理論的にもものを思考しており、政治とも無縁ではない。むしろ、時局のイデオロギーを意識しつつ、それとは異なる形で「日本」を思考しようとしている。そこには問題も含まれるが、その理論や近代に対する批判には一定の見るべき点があると思われる。